



第116回卒業式

3月19日(木)、第116回卒業式を挙行了しました。6年生の皆さん、卒業おめでとうございました。そして御家族の皆様、お子様の御卒業おめでとうございました。まずもって、お祝い申し上げます。また、これまで温かく子供たちを見守り続けてくださいました地域の皆様、域内の企業及び事業所の皆様、6年生は頼もしい姿で、しっかりと最後を締めくくりましたことを御報告いたします。これまでのお力添えに教職員を代表しまして、心より感謝申し上げます。

さて、昨年度から卒業式は、在校生の体育館列席を4年生と5年生とし、1年生～3年生は体育館のスペースの関係で、各教室からライブ映像を見ながらの列席としました。分散の形にはなりますが、年間の中でも大切な学校行事ですので、今年も「全員参加」といたしました。それにより、6年生を後輩全員で、式当日に歓送することができました。各自が「お別れ」というものをしっかりと経験し、成長につながったことと思います。

式でのエピソードです。ステージ上にて証書を手渡すのは、私と6年生が1対1になる時間です。あえて言わせていただければ、心を通わせる瞬間です。私が、お名前を読ませていただくと、目が合うはずいたり、小さく返事をしたり、また「おめでとうございます」とお声を掛けると、「ありがとうございます」と返してくれたり、笑顔を添えてくれたりしました。一人一人との瞬間に温かさが伝わりました。大舞台での緊張の場でしたが、築瀬の子は本番に強いです。

さて、各教室では、式場と同じように、児童は敬礼をしたり、歌ったりしてくれていたとのことでした。私が式辞の中で述べた「全員参加」に呼応してくれた各担任と児童に心から感謝です。

なぜ全員参加にこだわるのか。それは、法的根拠に基づき証書を校長が手渡すという厳かな行事を児童全員に経験させるべきであると考えているからです。低学年生ほど、参加には我慢が求められるかもしれませんが……。

※学校教育法施行規則第58条「校長は、小学校の全課程を修了したと認めた者には、卒業証書を授与しなければならない。」



令和8年度に向けて

3月24日(火)、令和7年度修了式を実施しました。まずは、各表彰の伝達。そして、修了式です。在籍児童全員の修了証を学年ごとに授与しました。本校児童のよさである「素直さ」は、たくさんのごことを吸収する基盤です。各御家庭においては、お子様の成長について、ぜひ話題にしてください。そして、4月に入りましたら、令和8年度末には、お子様をどのような姿に成長させていくか、各御家庭でも話し合ってみてください。

学校では、子供たちの自己肯定感の高揚に向けた支援を図ってまいりました。具体的には、「各自の強みも課題も含めて存在そのものを認め、プロセス中での努力や成長を褒め、更なるステップに向けて励ます」指導を推進し、教職員は児童の伴走者として、「ともに進む」かわりを進めてきました。児童一人一人をよく見つめ、「存在を認める、努力を褒める、挑戦へと励ます指導」に努め、子供たちの自己肯定感の更なる高揚に取り組んできました。学校評価の児童アンケートの結果を踏まえて、令和8年度も引き続き、児童の自己肯定感の更なる高揚に向けて、より一層の推進をしていきたいと考えています。

御家庭においては、お子様をしっかりと「見つめ」、細かく「見守る」ことで、認め・褒め・励ましてくださるようお願いいたします。子供には少しだけ教えて、あとは子供自身が考える。そして、挑戦するという流れを作ることが大切です。それは、子供の可能性を引き出すことにつながると考えます。じっくり見つめることで、親は子供が何に興味をもって、何に近づこうとしているのかが分かります。そして、手や口を出さずに見守ることが大切です。一番よいのは、褒めることです。子供は褒められればうれしいのは勿論ですが、何と言っても「成功体験」として記憶するのです。これも、自己肯定感の高揚に向けた大切な姿勢です。

「覚えざるに」

「正方眼蔵随聞記」の中に、「霧の中を行けば覚えざるに衣しめる」という言葉があります。私たちは、雨が降っていれば、傘をさしたり、かっぱを着たりしますが、「霧」なので濡れることはないだろうと判断し、そのまま歩いてしまいます。しかしながら、しばらくすると、知らないうちに衣はしっとりと濡れているという意味だそうです。

さらに、これに続けて、「よき人に近づけば、覚えざるによき人となるなり」と記されています。すなわち、よい人と一緒にいると、知らないうちに自分もよい人になっているということです。

さて、「教育の営み」には、2つの方向性があると考えています。1つは「教え導く」ことです。どうすべきなのか、なぜそうしなくてはならないのかを教え、理解を促し、行動へと導いていきます。もう1つは感化していくことだと思います。子供を取り巻く環境を整え、よりよい環境の中で生活するうちに、自然と身に付くようにしていきます。

「正方眼蔵随聞記」は、まさに、感化の大切さを教えていると思います。学校や家庭で明るい返事やあいさつが交わされていけば、自然と返事やあいさつができる。靴箱の靴やトイレなどのスリッパがいつもきれいに揃えられている環境で過ごせば、それが当たり前のこととしてできるようになってきます。

そのような望ましい環境を整えたいという考えで、私は「くつそろえ」や「あいさつ」、「傘を閉じること」に力を入れてきました。結果として、靴は下校後も揃う児童が出てきました。あいさつは、校内では活発になってきています。まだまだ、習慣化には至っていませんが、少しずつ少しずつ、霧が衣を湿らすように向上してきたと感じています。望ましい環境が整い、それが継承されていけば、やがて築瀬小学校の風土となっていきます。

そのような中、子供たちを感化していく上で一番大切な環境は、我々大人です。私たちの言葉や行動に子供は学び、感化されていきます。我々大人が常に我が身を振り返り、学び続けることの重要性を改めて感じているところです。



日々、本校教育活動を支えてくださっている皆様へ、深い敬意と感謝を込め、16回にわたって御案内してきました令和6年度学校だより『やなせ』を結びたいと思います。1年間御笑覧いただき、ありがとうございました。

「劫初より つくりいとなむ殿堂に われも黄金の釘 一つ打つ」